

山本組合総合病院
産婦人科

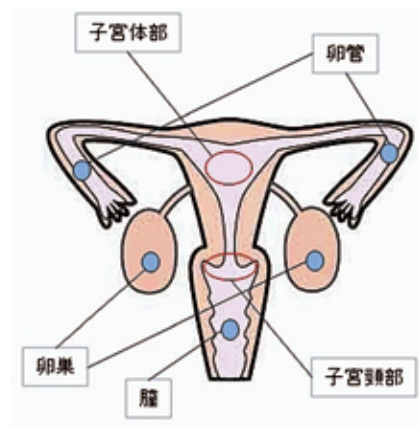
医師 松井 俊彦

子宮頸がんについて（その2）

今回は子宮頸がんの予防ワクチンについてお話をさせて頂きます。

子宮頸がんの原因が、ヒト・パピローマウイルス（HPV）であることは以前お話しさせて頂きました。このウイルスは、子宮頸部に感染すると長い時間をかけて、がんに進行していきま

す。このウイルスの感染を予防するのが、予防ワクチンです。



リスク型と呼ばれる、発がん性の高いウイルスがあります。16型、18型、33型、52型、58型などであり、なかでも16型と18型がもっとも多く、子宮頸がん全体の約70%の原因となつています。ワクチンは、この2種類のタイプのHPVの感染を防ぐことが可能です。

その方法としては、6ヶ月間に3回ワクチンを接種（筋肉注射）します。主な副作用は通常のワクチンと同様で、局所の痛み・発疹・腫れ・発熱・倦怠感・食欲不振・失神等があります。接種を受けた中学生に、失

神の発症が多いと最近マスコミで騒がれましたが、重症化することはなく、適切な対応を行えば問題ありません。

その接種対象ですが、子宮頸がん全体を減らすことを考える上で、もっとも効果的なのが性交渉のない世代（中高生）です。この世代にワクチン注射を続けることにより、子宮頸がん全体の7割以上の発生を予防できると言われています。

またこのワクチンはインフルエンザワクチンとは異なり、3回の接種で効果の持続は最低20年以上あるだろうと言われています。

現在、日本では中高生女子に対して、公的負担（市町村の補助）での接種が行われており、無料で接種可能です。詳細については、各市町村の役所の担当部署に確認してみてください。

成人女性についても、このワクチンの効果は20歳の女性で70%くらいの効果、30代女性で50%の効果があると言われています。ただし、この場合は公費負担とならず私費扱いになるので、3回の接種で4〜6万円ほどかかります。



注意しなければならぬのは、このワクチンを受ければ、完全に子宮頸がんを予防できる訳ではないということです。先ほど述べたように、予防できるのは7割程度であり、かつ既に感染したウイルスを治療することはできません。重要なことはワクチンとがん検診